

Title	関一著 工業政策 下巻
Sub Title	
Author	
Publisher	三田学会
Publication year	1913
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.7, No.4 (1913. 10) ,p.822(200)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19131022-0200

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

火山なる支那と唇齒の關係を有するを以て國民一致して外交問題の解決に努力す可き地位に在り。されば、自然の成行に任かせなば當然將に來る可き激烈なる資產階級對無資產階級即ち労働者の爭鬭に對して豫じめ緩和の策を講じ、以て一朝其爭鬭の發生したるとき、兄弟牆に聞きて外人の侮を招くの愚を習ふことを避けざる可からず。而して此労働争鬭の緩和策を講ずる爲めには先づ其爭鬭の原因形式結果を研究し、且つ此種の争鬭に對して歐米の先進國が既に採用又は現に試みつゝある種々なる救濟策を比較研鑽し、然る後是等の方法を参考として我國に最も適せる争鬪の豫防策を講ずるを以て可すべし。

法學博士關一氏は人の知れるが如く工業政策專攻の大家にして、昨年『工業政策』上卷と名くる書物を著はして廣き意義に於ける工業の發達に關する氏の研究を發表せられたるが、本年に至りて更に頭書の如く同書の下卷を上梓せられたり。此下卷の收むる所は吾人の知らんと欲する労働問題發生の原因、並に歐米各國の採り來りたる救濟策の梗概と之に對する著者の批評にして、且つ各章の初めに内外の参考書を掲げたれば、労働問題の研究者は勿論一般憂國の士に取て本書は有數の好参考書なりと謂つ可し。

西垣恒矩著　米穀經濟論

大正二年六月實文館發行
菊版九五九頁定價金參圓參拾錢

我國に於ける憲政の發達は頗る遲々として、婦人參政權問題は愚が成年男子の一般投票權すらも未だ重大なる政治問題と爲りざるが如き有様なり。否明治二十二年に發布せられたる所謂憲法なるものすら昨春官僚黨に依りて躊躇せらるゝの危險に瀕したり。而して我國の官僚黨は陸海軍を其中堅と爲すものなれば、日本は未だ武力と金力との争鬭時代を脱せざるものと謂ふ可く、從つて金力が武力に打勝ちたる後に於て起る可き金力と労力との争鬭は未だ開始せらるなり。

然りと雖も、前期議會開會中に於ける政權爭奪の經路を按するに、武力が遂に金力に屈するに至るより遠き將來のことにも非ざる可しと思はる。而して資產階級が一朝政權を掌握するの曉には此階級に對する無資產階級の運動が開始せらるゝ順序と爲る可し。此運動たるや、一面に於ては般投票權の請求として現はれ、又一面に於ては労働組合の活動の形を以て世人の耳目を擧動するに至るならん。而かも、我國は東に不幸なる對米問題を控へ、北に侵略に妙を得たる露に接し、西に噴

兩者は各々稍異なる方面を研究せるものなれば、之が優劣を論すべきものならざれど、清水氏の著書は概して本書よりも資料の精選に努めたるが如し。之に反して後者は前者よりも粗雑なれども統計を載すること多し。又前者の議論は後者よりも經濟學の原理に基盤を置く所多きものなるやに見受け。唯本書に於ては米價の騰貴と貨幣の増加との關係を明かにせんと努めたる點に於て清水氏の著書に優れるを見る。

何れにしても、本書は前書と同じく問題を解決せるものに非ずして寧ろ問題の解決に必要な研究資料を提供せるものと看做すべし。斯く言へばとて吾人は決して本書の價值を疑ふ者に非ずして却つて吾人は不充分なる資料を用ひて問題を解決せんと勉むる著述よりは寧ろ本書の如き資料其物を提供せる著作を歓迎する者也。

米穀經濟を論ずるに當りて種々の方面より之を試むることを得べし。一は生産の技術、二は需給の關係、三は取引、四は消費

者若くは生産者の利益等なり。清水氏の著書は此中第三の立脚地を選び、西垣氏の著述は第一、第二、第四に重きを置けるが如し。此兩書の中孰れか其一のみを讀まば、何か物足らぬ心地するならんも、兩者を併せ讀まば、米穀經濟の大體に通ずるに有效なるものなる所以を論述す。